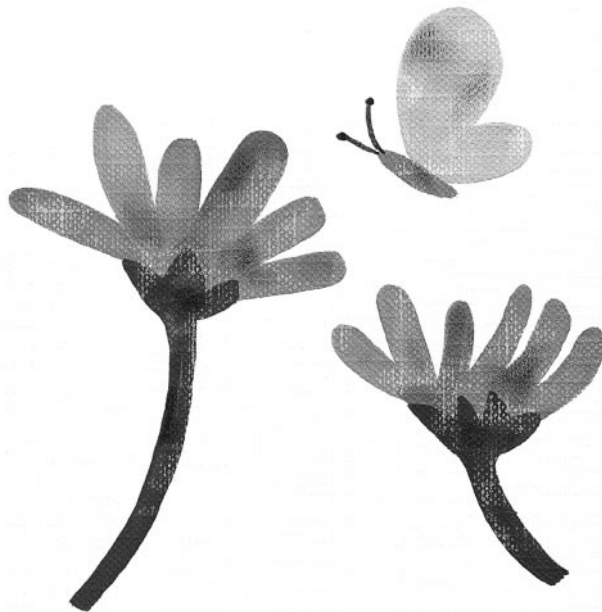


第 2 章

子どもへの
しつけ・教育観



1

日頃の生活習慣

1. 生活習慣の実態

ここでは、子どもの日頃の生活習慣について、「自分一人ができる」「親がときどき手伝う(言う)」「親がよく手伝う(言う)」「自分一人できない」の4段階でたずね、生活習慣の自立度について明らかにした。

■ 自立度が高いのは、翌日の学校の準備

(図2 - 1)

調査対象が小3生～中3生のため、日頃の生活習慣についてはかなり自立できている。

「自分一人ができる」と「親がときどき手伝う(言う)」の割合を合わせると、8項目すべてにおいてほぼ7割を超えていた。

「自分一人ができる」割合が高い上位3位をみると、第1位「翌日の学校の用意や準備」73.5%、第2位「歯磨きの習慣」69.4%、第3位「あいさつやお礼を言うこと」61.4%だった。逆に「親がよく手伝う(言う)」割合が高いのは「決まった時間に起床・就寝すること」「遊んだあとや部屋の片づけ」「家事の手伝い」だった。それらの項目は「自分一人できない」数値も他の項目に比べて若干高く、「家事の手伝い」は4.4%だった。

■ 女子のほうが自立している(図2 - 2)

男女別に「自分一人ができる」割合をみると、すべての項目で女子の数値が高かった。これは前回調査の年少児から小2生までの傾向と同様である。とくに差が大きいのは、「約束を守ること」19.8ポイント差(男子38.7%、女子58.5%)、「翌日の学校の用意や

準備」16.3ポイント差(男子65.3%、女子81.6%)、「歯磨きの習慣」14.3ポイント差(男子62.2%、女子76.5%)だった。

■ 学年が上がっても約束は守れない

(図2 - 3)

「自分一人ができる」割合の学年による推移をみてみた。どの項目も学年が上がるにしたがって「自分一人ができる」割合は高くなるが、とくに変化が大きいのは「歯磨きの習慣」「食事のマナー」「あいさつやお礼を言うこと」「翌日の学校の用意や準備」だった。逆に「自分一人ができる」割合の伸びが少ないのは、「約束を守ること」(中3生と小3生の差9.2ポイント)、「家事の手伝い」(同12.4ポイント)、「決まった時間に起床・就寝すること」(同14.7ポイント)、「遊んだあとや部屋の片づけ」(同22.7ポイント)だった。これらの項目は、年少児(前回調査)から中3生まで12学年通してみても「自分一人ができる」割合の伸びは低く、おそらく成人するまで大幅な上昇はしないだろう。基本的な生活習慣やルールは、成長にしたがい習慣化がむずかしくなると考えられるため、自立度の低いこれらの項目は、とくに幼児期からきちんとしつけていく必要があるだろう。また、小学校高学年～中学生へと成長するにつれて、親は学習面のしつけに意識が偏りがちだが、生活習慣についても引き続き配慮していくことが大切である。

図2 - 1 日頃の生活習慣

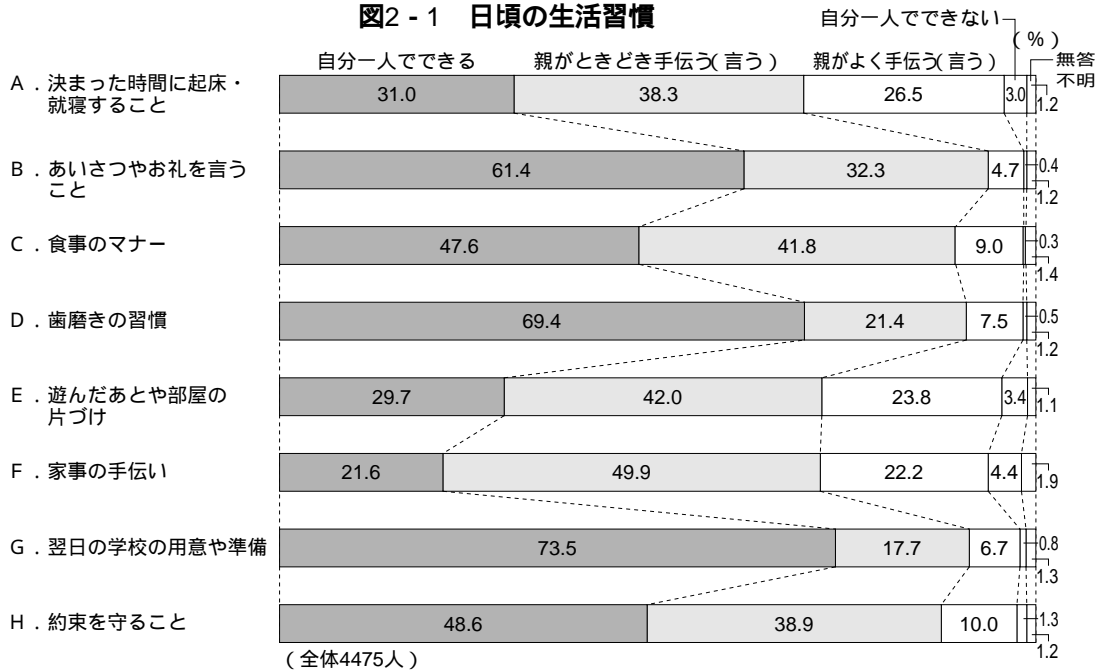
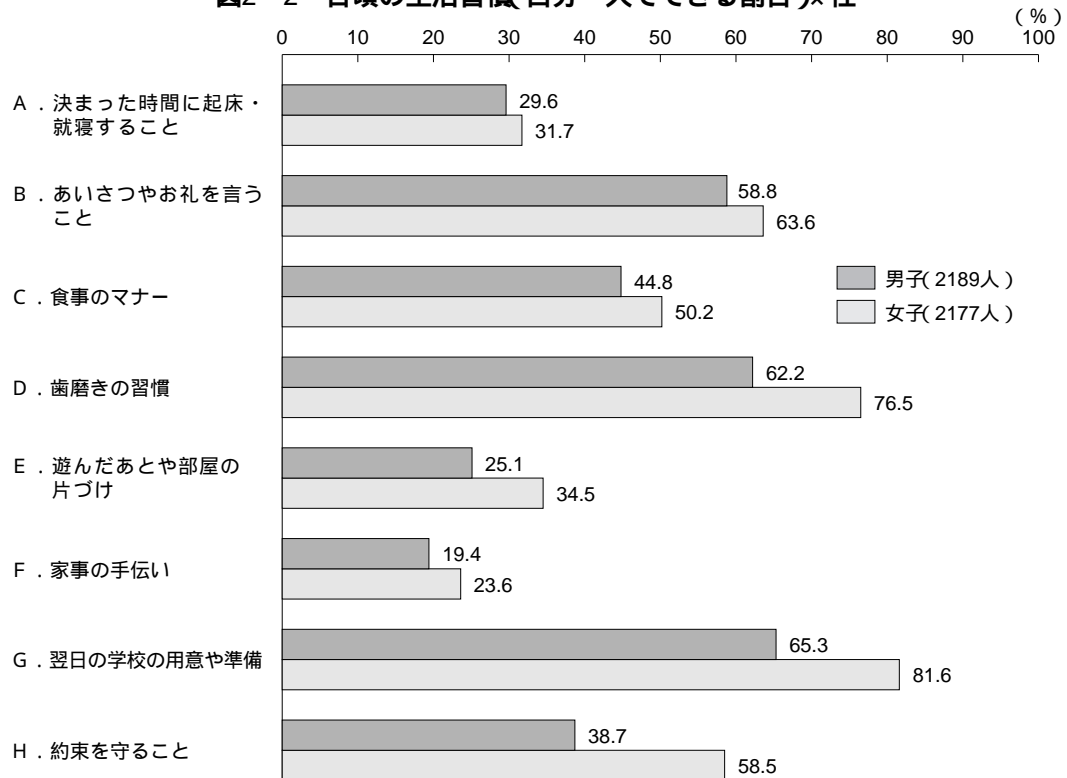


図2 - 2 日頃の生活習慣(自分一人のできる割合)×性



■ 第2子以降のほうがお手伝いできる

出生順位別（第1子と第2子以降別）に「自分一人で行ける」割合をみると、すべての項目で第2子以降のほうが高かった。一番差が大きいのは「家事の手伝い」で、第1子17.6%、第2子以降25.1%と7.5ポイントの差がみられた。上にきょうだいがいると、一緒にお手伝いをする機会が増えるため、自立度が高くなるのではないだろうか。次に母親の就業

状況別に「自分一人で行ける」割合をみたが、あまり差はなかった。一番大きな差があったのは、「決まった時間に起床・就寝すること」で、常勤者の子どもの割合が最も高かった（専業主婦31.1%、パートタイマー29.1%、常勤者36.0%で、最大6.9ポイントの差があった）。若干常勤者の子どもが自立しているようだが、母親が家庭で過ごす時間の長さは、生活習慣の自立度にあまり関係ないといえるだろう。

2. もう少しきちんとやってほしいこと

ここでは、前の質問で聞いた生活習慣8項目の中から、「もう少しきちんとやってほしい」と思うことすべてに をしてもらった結果をまとめた。

■ 「遊んだあとや部屋の片づけ」をきちんとしてほしい（図2-4）

母親が子どもに対してきちんとやってほしいと思うことは、第1位「遊んだあとや部屋の片づけ」41.2%、第2位「決まった時間に起床・就寝すること」23.4%、第3位「家事の手伝い」21.8%、第4位「約束を守ること」19.1%、第5位「あいさつやお礼を言うこと」15.1%だった。片づけは、前回調査でも第1位で、生活習慣の自立に関する親の願いは変わらないことがわかる。

■ 女子に家事の手伝いを求めている

男女別にみると、ほとんどの項目で男子の割合が高かった。前述のように男子のほうが自立していないため、当然の結果といえそう。とくに男子の割合が高いのは、「約束を守ること」13.5ポイント差（男子25.9%、女子12.4%）、「翌日の学校の用意や準備」11.2ポイント差（男子18.0%、女子6.8%）、「歯磨きの

習慣」6.1ポイント差（男子13.4%、女子7.3%）だった。前述のように男子のほうが約束を守れないため、男子の母親がそれを強く望むのは理解できるが、そもそも男子のほうがなぜ約束を守れないのか。反抗期特有の親（母）子関係のむずかしさが男子により顕著に出ているからだろうか。大変興味深いところである。一方、女子をもつ母親が求めているのは「家事の手伝い」で、男子16.5%に対して女子27.4%と10.9ポイントの差があった。“女の子に家事を手伝ってもらいたい”という考え方の母親が多いようだ。学校教育では家庭科の男女共修が実施されているが、家庭では相変わらず女子に家事の手伝いを望んでいる。そのような親の考え方が変わらないかぎり、教育効果はあまり期待できないのではないだろうか。

■ 学年が上がるにつれて、家事の手伝いを期待（図2-5）

学年が上がるにつれて、ほとんどの項目できちんとしてほしい割合は低くなる傾向にある。ただし、「家事の手伝い」だけは学年が上がると数値が高くなり、小3生～中3生までで8.3ポイント高くなっていた。

図2 - 3 日頃の生活習慣(自分一人のできる割合)×学年

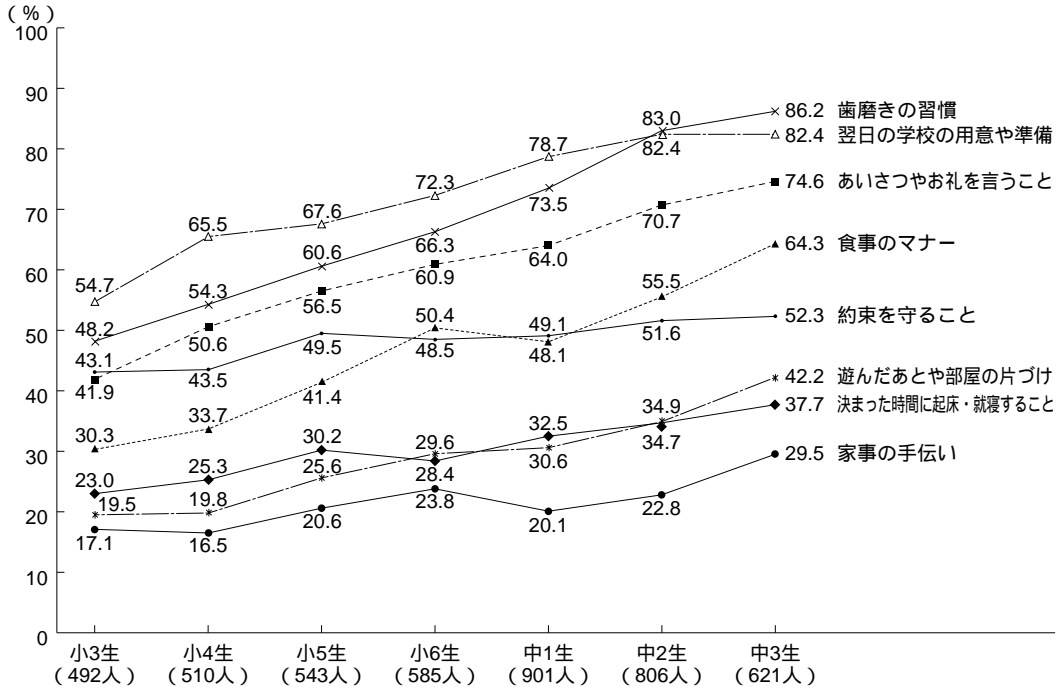
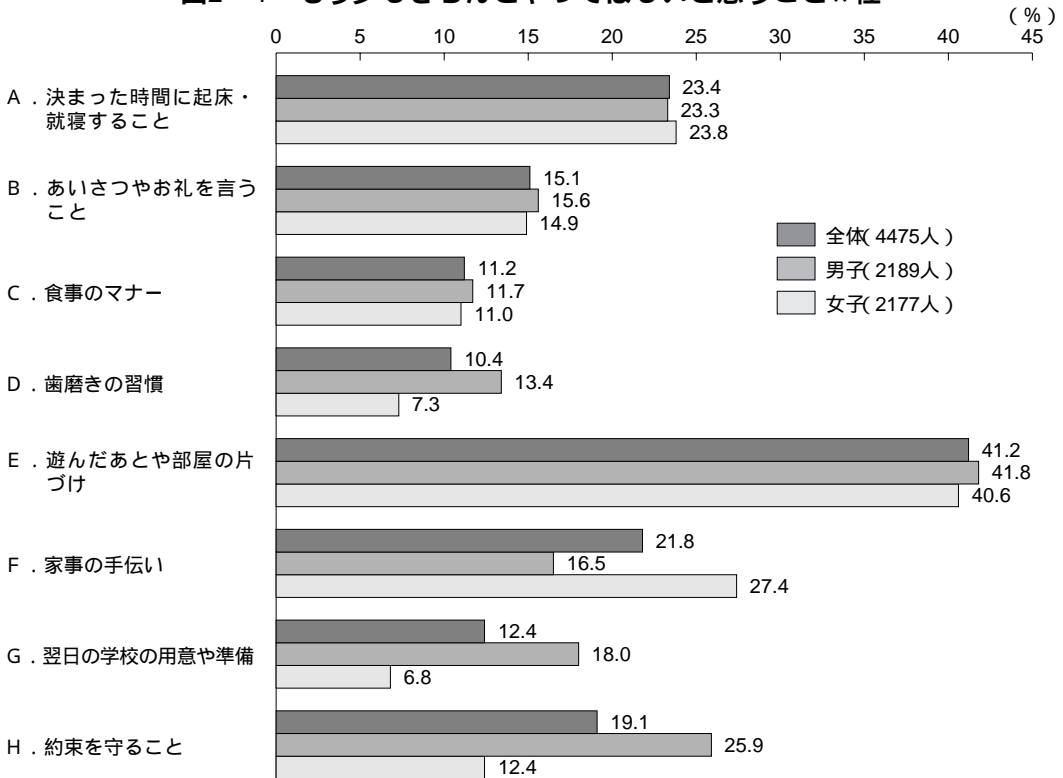


図2 - 4 もう少しきちんとやってほしいと思うこと×性



■ 出生順位別、母親の就業状況別で差はない
出生順位別では、第1子のほうがきちんとしてほしいと思う割合が高い。しかし第2子以降との差はそれほど大きくない。差があるのは「家事の手伝い」5.2ポイント差（第1子24.6%、第2子以降19.4%）「遊んだあとや部屋の片づけ」4.5ポイント差（第1子43.6%、

第2子以降39.1%）だった。また、母親の就業状況別ではほとんど差はなかったが、「遊んだあとや部屋の片づけ」だけ多少差がみられた。専業主婦40.3%、パートタイマー41.5%、常勤者44.9%と、専業主婦に比べて常勤者のほうが4.6ポイント高かった。

3. 生活習慣や自立状況に対する満足度

ここでは、子どもの日頃の生活習慣や自立の状況に対する満足度を「とても満足している」「まあ満足している」「あまり満足していない」「ぜんぜん満足していない」の4段階でたずねた。

■ 満足度は高い（図2-6）

「とても満足している」7.0%、「まあ満足している」69.3%、「あまり満足していない」20.3%、「ぜんぜん満足していない」2.0%だった。「とても満足している」と「まあ満足している」を合計した割合は76.3%となり、8割弱の人が子どもの自立の状況に満足していることがわかる。満足度は前回調査に比べて高くなっていた。

■ 女子、第2子以降の満足度が高い（図2-6、7）

「とても満足している」と「まあ満足している」を合計した割合を男女で比較すると、男子72.0%、女子81.0%と、女子のほうが9.0ポイント高かった。女子のほうが満足度が高いことがわかる。また、同じように第1子と第

2子以降を比較すると、第2子以降の満足度が高かった。学年別、母親の就業状況別では、大きな差はなかった。

■ 「片づけ」「起床就寝」「約束を守ること」の自立度が母親の満足度を左右する

母親を子どもの自立状況に満足している群（「とても満足している」と「まあ満足している」を合計した割合、以下「満足群」と満足していない群（「あまり満足していない」と「ぜんぜん満足していない」を合計した割合、以下「不満足群」）に分け、子どもの自立の状況（「自分一人でする」と「親がときどき手伝う（言う）」を合計した割合）を比較してみた。満足・不満足群で差が大きいのは、第1位「遊んだあとの片づけ」（満足群 - 不満足群 = 29.0ポイント）第2位「決まった時間に起床・就寝すること」（同27.7ポイント）第3位「約束を守ること」（同24.1ポイント）だった。「片づけ」「起床就寝」「約束を守ること」の自立度が母親の満足度を左右することがわかった。

図2 - 5 もう少しきちんとやってほしいと思うこと×学年

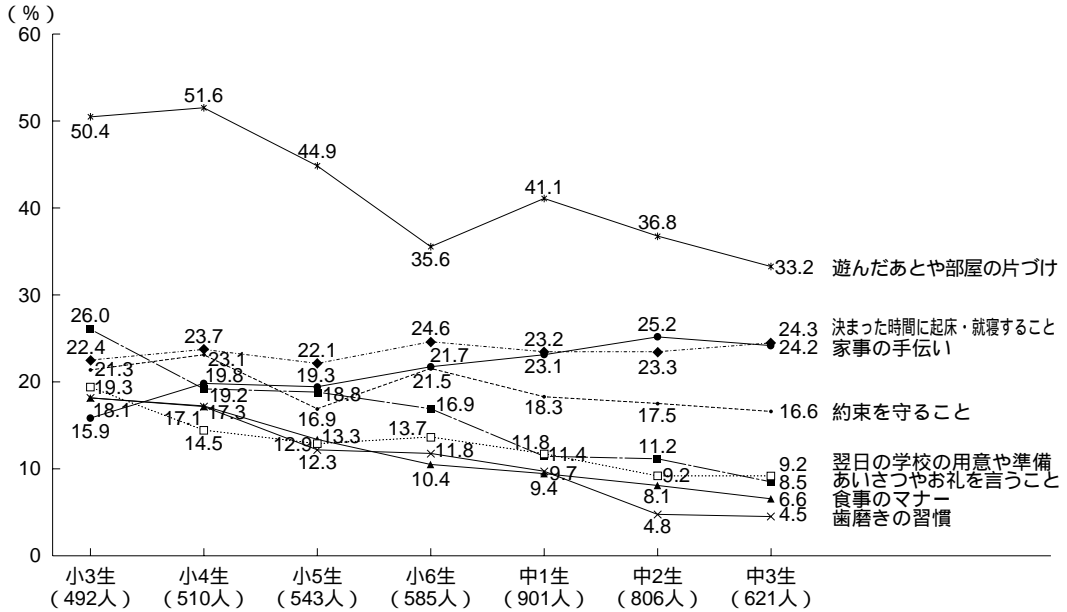


図2 - 6 日頃の生活習慣や自立の状況に対する満足度×性

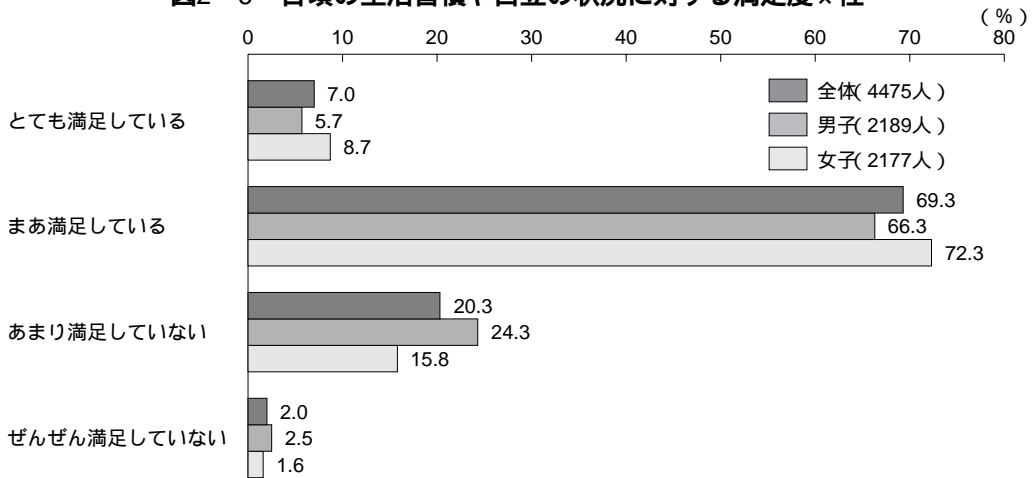
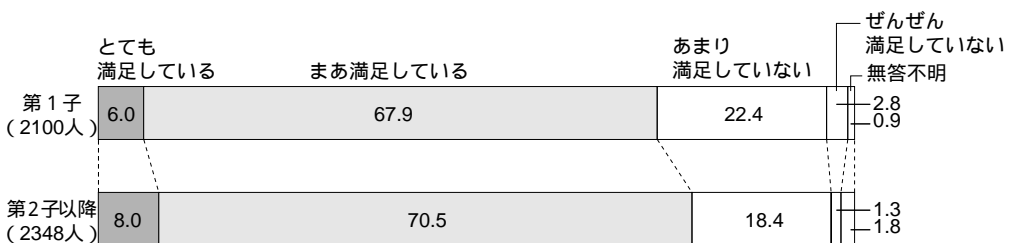


図2 - 7 日頃の生活習慣や自立の状況に対する満足度×出生順位



保護者と学校の教育の役割分担

子どものしつけや教育について、「家庭と学校のお互いの役割分担」をどのように考えているかを、「学校に遅刻しない」から「将来の進路・進学先を考えること」まで、18項目にわたってたずねた。内容は、学校での行動や勉強、あるいは生活習慣、社会的マナー、進路など多岐にわたる。選択肢は、「どちらか」というと家庭が教育する」「どちらか」というと学校が教育する」「あえて教育しなくてよい」の三つである。

家庭の役割とする項目が圧倒的に多い

(図2-8)

図2-8は、結果を子どもの性別に示したものであるが、性別にかかわらず、家庭の役割とする項目が非常に多くなっている。全18項目中、15項目において「どちらか」というと家庭が教育する」という回答比率が他の選択肢を上回っている。家庭の役割とする回答が9割を超える項目は五つある。「学校に遅刻しない」「忘れ物をしない」「起床時間・就寝時間などの生活習慣」「歯の健康管理」「乗りものや路上などでのマナー」である。家庭内の基本的な生活習慣とともに、社会的なマナー

なども家庭の役割としていることがわかる。

学校の役割とする回答が多くなるのは、「授業中騒いだり、立ち歩いたりしない」「スポーツ能力や体力の向上」「音楽や美術など芸術面の才能を伸ばす」の三つである。教室内のこと、そして専門性を要するもの、などが学校の役割と考えられているのだろう。ただし、これらの項目も圧倒的に学校の役割と考えられているわけではない。「音楽や美術など芸術面での才能を伸ばす」などは、家庭の役割とする比率(4割前後)と学校の役割とする比率(5割前後)には、あまり差がみられないのである。分担意識が家庭と学校の間で拮抗している項目ともいえるだろう。

「あえて教育しなくてもよい」という選択肢は、18項目全体を通して比率は低い。ほとんどの項目で、1割以下となっている。したがって、これら18項目は、その多くは家庭において、またいくつかは学校において教育するものと考えられているということになる。なお、「あえて教育しなくてよい」が1割前後に高まるのは、「友だちとのつきあい方」「スポーツ能力や体力の向上」「音楽や美術など芸術面の才能を伸ばす」の三つのみである。

■ 子どもの性別で差がない教育の分担

同じく図2 - 8で、子どもの性別による家庭と学校の役割分担についての考えの差をみるることができる。図に示すように、子どもの性別で結果に大きな差はない。「音楽や美術など芸術面の才能を伸ばす」という項目のみ、子どもが女子のとき、「どちらかというと家庭が教育する」が多く、男子のとき、「どちらかという学校が教育する」が多くなっているくらいである。しかし、これも5%程度のわずかな違いであり、全体としては差がないといってよいだろう。

■ 学年別にみる教育分担の考え

小3生から中3生まで、子どもの学年によって、家庭と学校の役割分担についての考えが変化するだろうか。

項目によって違いを示しているものといないものがある。違いを示している項目をあげてみよう。学年別というより、小学校と中学校という学校段階で違いがみられる。「どちらかという家庭が教育する」という割合が、小学校段階のほうが中学校段階より多いのは、「夏休み中の勉強」「家での学習習慣」「スポーツ能力や体力の向上」「将来の進路・進学先を考えること」などである。逆に、中学校段階のほうが小学校段階より「どちらかという家庭が教育する」という割合が多い項目はあまりみられない。このことからすると、

鮮明な変化を示しているわけではないとしても、子どもが大きくなるにしたがって、家庭の役割という考えが少しは減少しているといっていよう。

■ 母親の就労の有無によって 分担意識に差はない

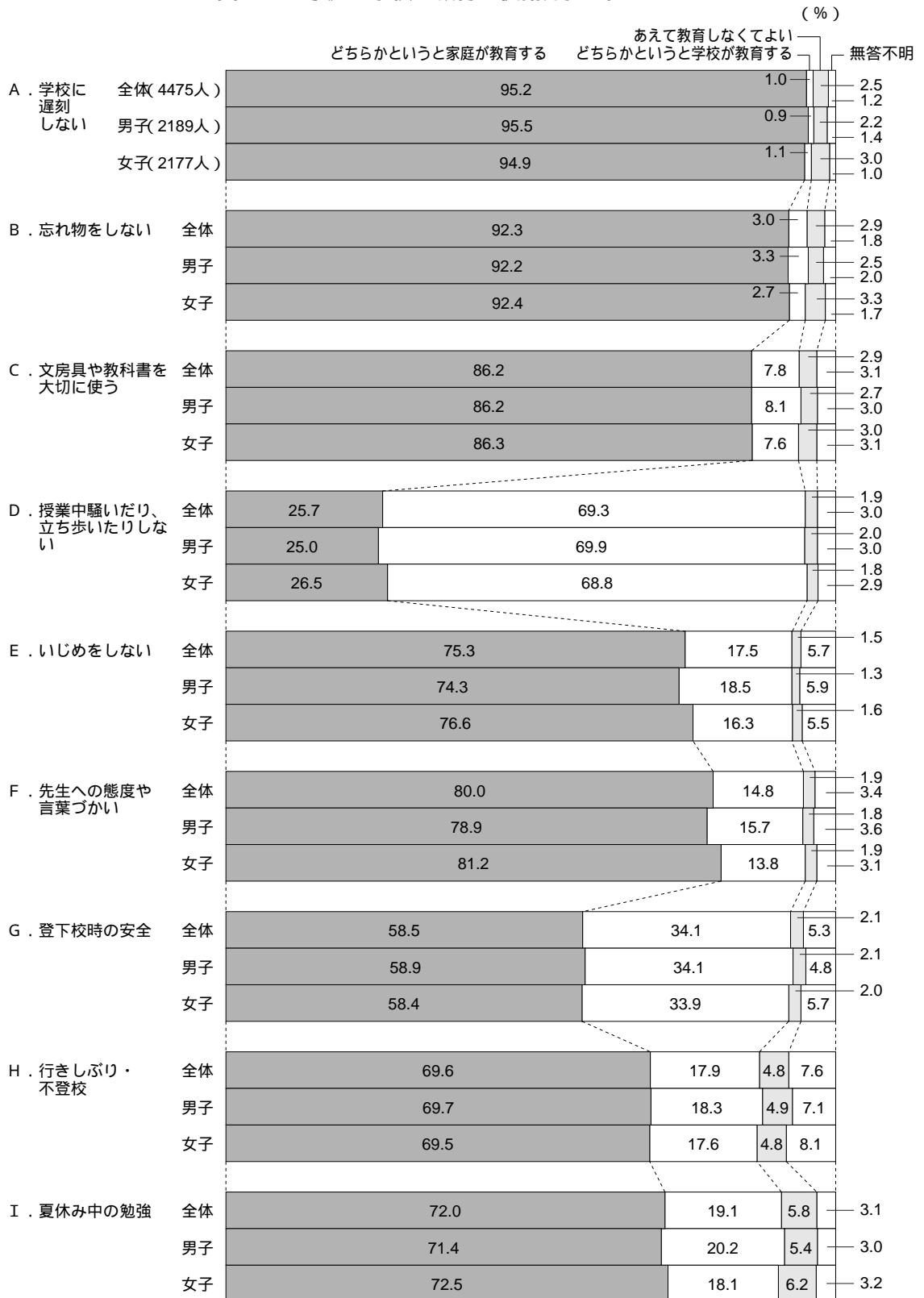
母親の就業状況別（専業主婦、パートタイマー、常勤者）に、家庭と学校の役割分担についての考えをたずねた結果をみたが、ほとんど差がなかった。「どちらかという家庭が教育する」という割合が、専業主婦が常に多いわけではない。常勤者の母親が多い項目もある。

■ 子どもの出生順位別でも差はない

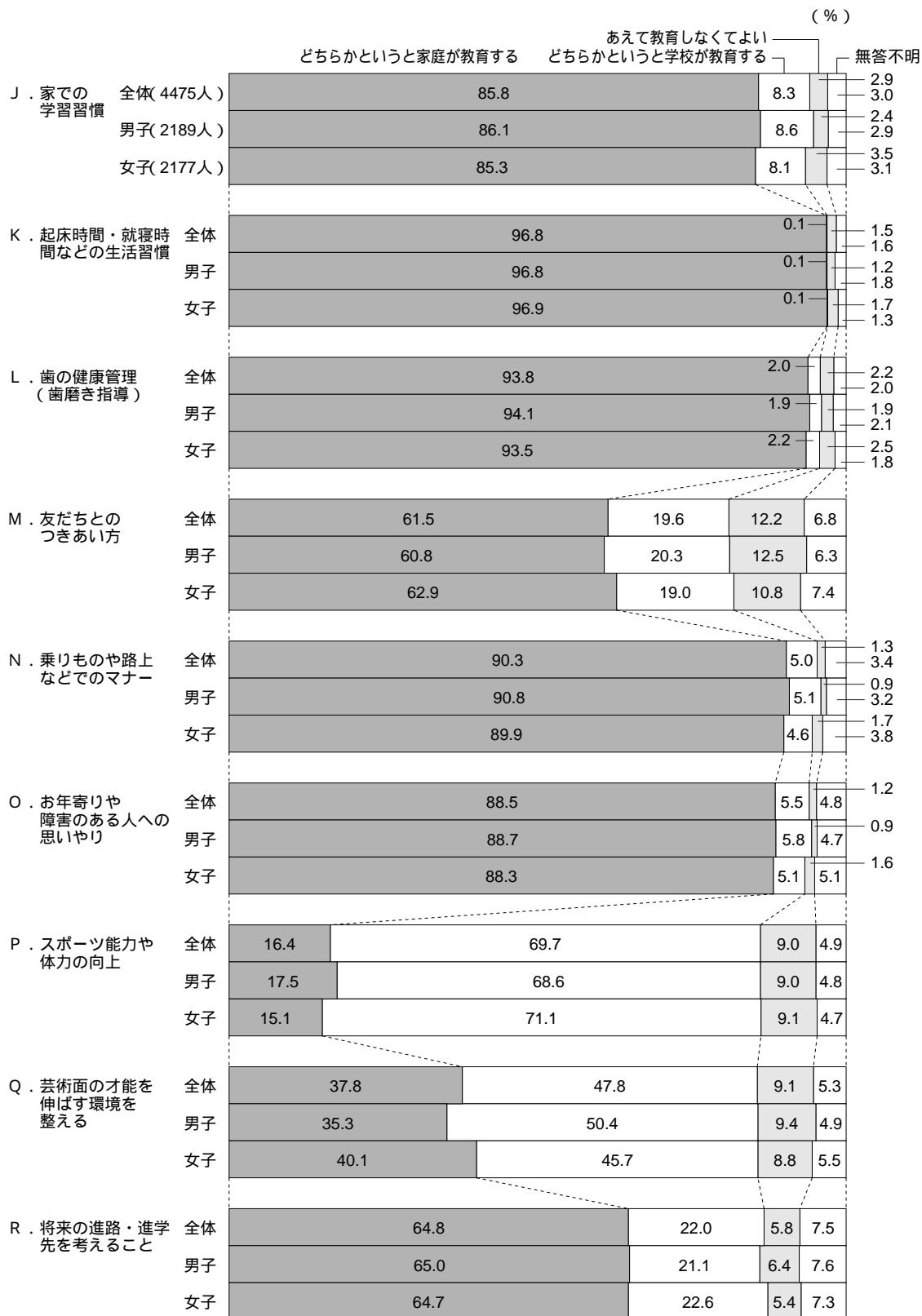
子どもが第1子か、第2子以降かの別によって結果をみたが、あまり違いはなかった。

以上、子どものしつけや教育について、家庭と学校とを対比的に示した上で、その役割分担を問うてみたわけである。

図2 - 8 家庭と学校の教育の役割分担×性



(次ページへつづく)



学校への保護者の要望

学校への要望を自由に記入してもらった。回答の内容は多様である。一人で複数の要望を記入したものもある。これらをアフターコードして、表2-1のように要望・意見を合計71個に分類した。回答者は1,043人であるが、複数(最大四つ)回答した人もいるので、回答頻度(1,707)は回答者数を上回っている。

どんな要望が多いか？

「子どもの声に耳を傾けて」が一番
(表2-1)

要望の多かったものから順に七つあげると次のようになる。「子どもの意見に耳を傾けて。子ども一人ひとりをよく見守ってほしい」「教師の質を上げてほしい。もっと経験のある教員を」「親同士が仲良くなれる機会が少ない」「人間性が信頼できない先生が多い」「勉強だけでなく人格教育も」「担任の先生の声が伝わってこない。学級便りを。もっと学校の様子を知らせてほしい」「教育制度への不満・改善」である。これら七つは、いずれも

全体の5%以上の親が要望・意見としてあげているものである。親の要望は多様であることがわかる。以下、これら比較的要望の多かった七つの項目を順にみていこう。

男子の親にとくに多い

「子どもの意見に耳を傾けて」

子どもの性別でみると、「子どもの意見に耳を傾けて。子ども一人ひとりをよく見守ってほしい」というのを、男子の親の2割近く(18.5%)があげている。これは女子の親(12.3%)よりも多い。「人間性が信頼できない先生が多い」や「教師の質を上げてほしい。もっと経験のある教員を」「もっと一人ひとりにわかる教え方を。もっとおもしろい授業を」も男子の親に比較的多くなっている。

女子の親に比較的多い要望は、「勉強だけでなく人格教育も」や「制服の規則を実際の気温に即したものに。校則・管理が厳しい・不適當」「学校との連絡・交流方法の改善」などである。

表2-1 学校への保護者の要望(上位15位)

順位	項目	総数	小学校	中学校
1	子どもの意見に耳を傾けて。子ども一人ひとりをよく見守ってほしい	162	68	94
2	教師の質を上げてほしい。もっと経験のある教員を	94	49	45
3	親同士が仲良くなれる機会が少ない	74	30	44
4	人間性が信頼できない先生が多い	64	25	39
5	勉強だけでなく人格教育も	59	22	37
6	担任の先生の声が伝わってこない。学級便りを。もっと学校の様子を知らせてほしい	55	28	27
7	教育制度への不満・改善	52	21	31
8	クラス人数を減らしてほしい	51	42	9
8	もっと一人ひとりにわかる教え方を。もっとおもしろい授業を	51	23	28
10	子どもが楽しく行ける環境を整えてほしい	46	33	13
11	学校との連絡・交流方法の改善	42	25	17
11	校則・管理が厳しい・不適當	42	8	34
13	設備改善・充実を	40	26	14
13	親同士のトラブル	40	31	9
15	もっと学校のことをオープンにしてほしい	38	12	26
全回答数		1707	799	908

(全体4475人、そのうち回答1043人)

■ 保護者の生の声

質問は自由記述であるから、調査票に書かれたそのままの声をいくつか紹介しておきたい。子どもの通う学校への要望から、現代の教育や親についての意見まで、さまざまである。多くは紹介できないが、各学年二つずつ、調査票から書きぬいて示そう。

「今のお母さんたちは自分の子しか見ない人がたくさんいると思います。もっといろんな子どもたちを見てこんな子もいるんだ……などいろいろ母親も勉強したほうが良いと思います」(小3男子/第1子/32歳/公立)

「子どもにあいさつをと言っているわりに、先生がしっかりあいさつできず、態度も悪い。まず子どもの見本になるようにしてほしい。また、好き嫌いはあるが、平等にして接してほしい。親の目を気にしてびくびくしていないでしっかりした信条を持ってほしい」(小3女子/第1子/35歳/公立)

「少子化で、クラス数が減っている。教員の採用も減っているのだろうか。教員側が活性化してほしい。小学校でも体育、美術専任の先生がいてもよいのではないだろうか。学校あたりの教員数が減っても、仕事は変わらず、一人ひとりの負担が増えているのではな

いか。クラス数の1.5倍の先生もしくはクラス人数を25名くらいまでに引き下げてもらえないだろうか」(小4女子/第1子/37歳/公立)

「今の子どもは学習することが多いので、少しかわいそうと思う。行事はとても楽しいのに、後から学習がせまってくるような感じで『疲れた～』と言う言葉をよく耳にする。同じ市内でも学校によって学習の大変さに差があることも耳にするので、その点も気になる」(小4女子/第1子/37歳/公立)

「親同士が仲良くやらなければいじめはなくなると思う」(小5男子/第1子/33歳/公立)

「役員にたびたびならされて困る。広くみなが受けられるよう(父親も含め)役員会は夜に!! ぜひ」(小5女子/第1子/39歳/公立)

「子どもの本当の姿を見てほしい。自分の好みや成績のよい子だけを見ないで。表面的にしか見えていないのに自己満足しないで。悩んでいる子、苦しんでいる子は、先生の目の前にいます」(小6女子/第2子/38歳/公立)

「塾などに行かなくてもいいように、勉強は学校でちゃんと身につけさせてほしい」(小6女子/第2子/42歳/公立)

「まず先生方が生徒と親に対して表と裏が

ないこと。先生でも生徒たちに乱暴な言葉づかいをしないでほしい。授業やその他の時間もちょっとした工夫で楽しい学校生活の基本をつくってほしい。学校内の掃除などはどんどんやらせてほしい。先生方のほうから生徒たちの考えや気持ちを押さえつけずに、自由にうけとめてあげてほしい。これはうちの学校にいえることではなく、どこの学校でもそうあってほしいなあという意見の一つです」(中1女子/第1子/36歳/私立)

「学校での子どもの様子がわかるような材料がほしいです。学校に出向く機会をもう少し増やすとか、子どもの文章の文集のようなもの、授業の様子がわかる資料など、家庭向けにも配布してほしい。自分の子どもだけでなく、同じクラス同じ学年の他の子どもたちが、どんなことを考え、感じているのかということがわかるようなもの」(中1男子/第2子/35歳/公立)

「今、学校生活の中で一番精神的にも大切なときが中学校であるはずなのに、なぜか暗いイメージがある。それはたぶん“進学”というものを意識している親と学校のあり方に原因があるような気がする。成績だけで人間を評価してしまう(言葉では絶対そうは言わないが)今の学校のあり方には絶望的なもの

すら感じるときがある。子どもたちにも無言の圧力となっているような気がする。人間的に生徒に影響を与えられるような教師がたくさん増えてほしいと心から願います(もちろんすばらしい教師もいらっしゃるが)」(中2男子/第3子/51歳/公立)

「『何をすると内申がアップします』などと授業中に先生が子どもたちに言うことは好きではない」(中2女子/第2子/42歳/公立)

「塾通いしていないと、高校の情報が入らなく、自分のレベルや高校の内容などわからなく不安が多い。教室に置いてある情報誌は足りないのでゆっくり見られないとのこと。家庭にも何らかの資料がほしかった」(中3女子/第2子/48歳/公立)

「子どもたちの個性を大切にしたい教育を考えていただきたい。集団生活だからといって、すべての子どもが適応できると考えた上に今の教育は行われている。その枠にはまれない子どもはおちこぼれになっているが、学校はそのような子どもたちに対して今は何もできないでいる。特別授業だって必要だと思いません」(中3男子/第2子/41歳/公立)

家庭で心がけている生活習慣

家庭で子どもを育てていく上で、母親はどのようなことを心がけているのか、7項目について、「とても心がけている」から「ぜんぜん心がけていない」までの4段階の選択肢を設けて答えてもらった。図2-9では「とても心がけている」の多い順に並べてある。

■ 人とのコミュニケーションがやはり大切
(図2-9、10)

上位の2項目、「あいさつやお礼ができるように」「友だちづきあいは大切に」は、「とても+まあ心がけている」を合わせると95.0%以上の母親が心がけているしつけである。さらに第3位の「目上の人などへの言葉づかい」も、単に基本的な礼儀というだけでなく、人とのよい関係を持ち続けるための基本的なマナーであると考え、母親たちは日頃、礼儀をわきまえて周囲の人々とのコミュニケーションをうまく保てる人になってもらいたいと思って子どもを育てていることがわかる。

母親が家庭で行っているしつけには、「①生活の基礎習慣、②行儀、作法などの社会生活のルール、③独立した社会人として必要な能力の養成、の三つがある」と松田道雄は述べている(『私の幼児教育論』岩波新書1965)が、今回の調査で上位になった3項目は社会生活のルールのしつけ項目に入る。

これら3項目は子どもの学年が上がっていてもあまり変わらない(図2-10)。「あいさつやお礼ができるように」というしつけは小3生では98.6%(とても+まあ、以下同じ)、中3生でも96.9%の母親が心がけている。「友だちづきあいは大切に」は小3生96.9%、中3生93.4%、「目上の人などへの言葉づかい」は多少変化はあるが、小3生92.6%、中3生93.5%となっている。すべての学年で共通に重視されているしつけだといえよう。

■ 生活の基礎習慣のしつけ(図2-10)

一方、「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活リズム」は生活の基礎習慣のしつけである。これは「とても心がけている」と「まあ心がけている」を合わせると第2位になる。とくに小3生の母親は97.7%もが心がけており、中3生になると91.3%へとやや減少する。しかし、第1章1節「現在の子育ての気がかり」の結果をみると、「生活リズムと朝起きる時間・夜寝る時間」をあげる母親は学年が上がるにつれて多くなっていく(小3生30.9%、中3生47.3%)。中3生にもなると、子どもの不規則な生活ぶりが悩みの種となっちはいるものの、基礎的なしつけはもうしなくなっている様子が見えてくる。

図2-9 家庭で心がけている生活習慣

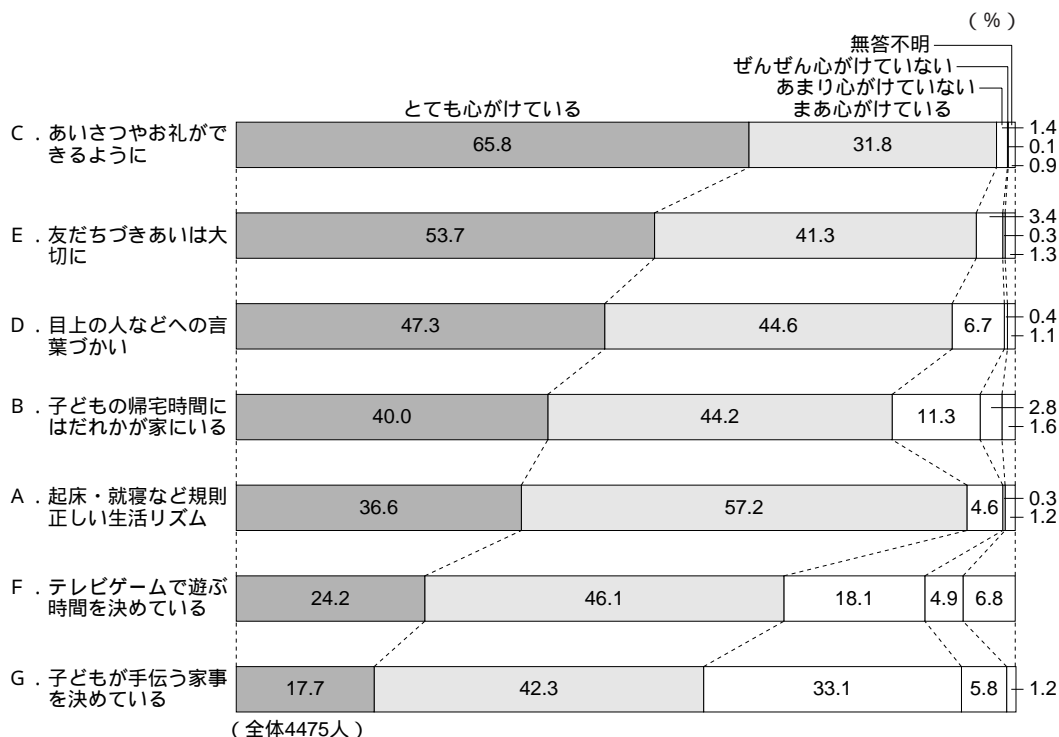
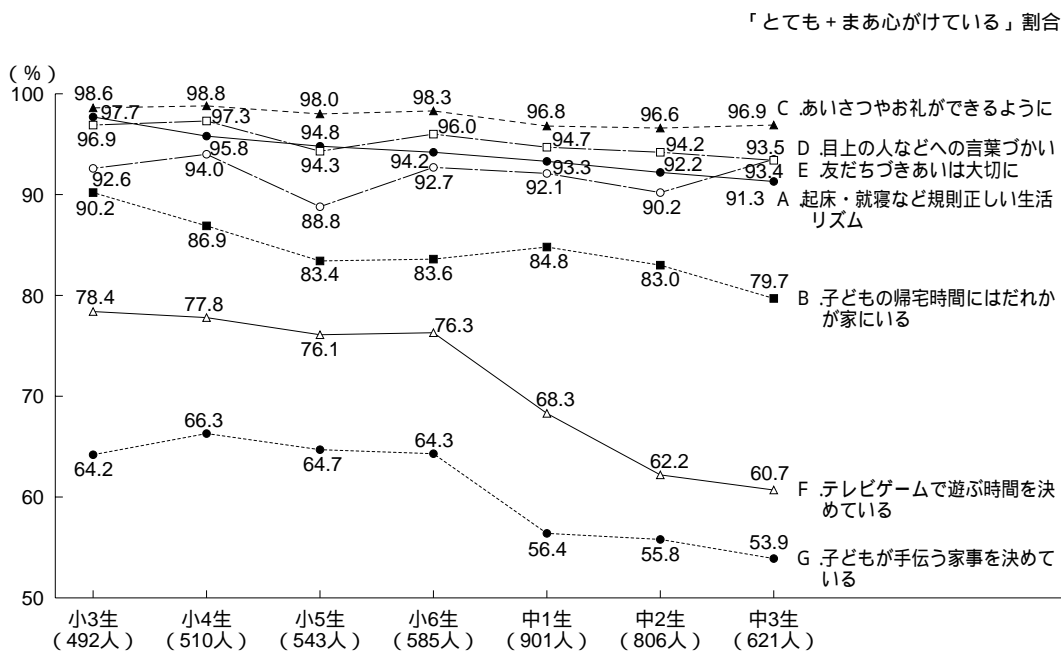


図2-10 家庭で心がけている生活習慣×学年



■ 学年差が大きいテレビゲームとお手伝い

(図2 - 10)

さて、「テレビゲームで遊ぶ時間を決めている」と「子どもが手伝う家事を決めている」は、家庭で具体的に“決まり”を作っているかどうかという項目である。7項目中、肯定率が最も低かったのがこの2項目である。それでも、「テレビゲーム」については70.3% (全体値)、「家事の手伝い」については60.0% (全体値)の母親が心がけていた。

この2項目は学年差が比較的大きい。図をみると、中学生になるとぐっと割合が低くなることがわかる。とくに、「テレビゲームのしつけ」のほうは、小3生78.4%、中3生60.7%と、差が大きい。テレビゲームをする子どもは中学生になるとかなり少なくなることが種々の調査で報告されているが(例えば『東京都子ども基本調査報告書』東京都生活文化局1996など)それを反映しているのか、第1章1節「現在の子育ての気付き」のように(数値は巻末の基礎集計表を参照)「家でのテレビゲームなどの遊び」に関して悩みや気付きをもっている母親は中学生になると少なくなる(小3生の27.4%、中3生の16.9%)。「テレビゲームのしつけをする」割合が中学生の母親で低くなるのは、このような実態と関係しているようである。

「子どもが手伝う家事を決める」よう心がけている母親は、小学生ではまだ6割を超えているが、中学生になると少なくなり、中3生では53.9%になってしまう。

■ お手伝いと母親の就業状況(図2 - 11)

この「子どもが手伝う家事を決めている」「とても心がけている」のは、専業主婦15.3%、パートタイマー18.9%、常勤者21.4%で、働く母親が家事を手伝わせようとしている様子がうかがえる。ところが、これを小・中学生別にみると、図2 - 11のように、中学生になると母親の就業状況による違いは大変小さくなる。

■ 子どもの帰宅を家で迎える(図2 - 10)

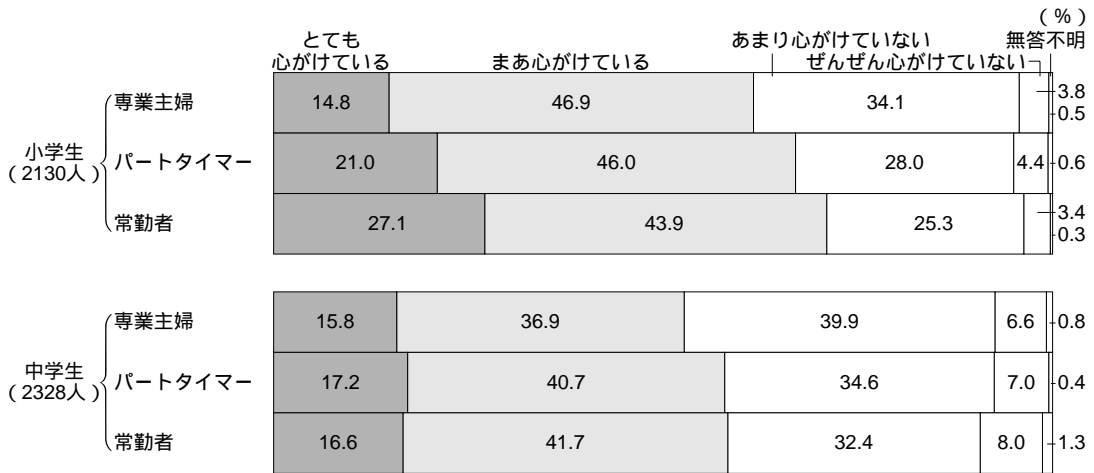
「子どもの帰宅時間にはだれかが家にいるようにしている」のは、やはり小学生の母親に多く、中学生になるとゆるやかだが減少していく(図2 - 10)。小3生で90.2%、中3生では79.7%の母親が、だれかが家で子どもの帰宅を迎える、としている。母親の就業状況別に「とても心がけている」割合をみると、専業主婦55.2%、パートタイマー31.7%、常勤者23.8%となっている。小・中学生別にみても同様に就業状況による違いがみられた。

■ 男子と女子(図2 - 12)

7項目について子どもの性別にみたが、違いは概して小さい。目立つのは「テレビゲームで遊ぶ時間を決めている」である。男子の母親のほうがこのしつけを心がけている。テレビゲームに熱中するのは、「現在の子育ての気付き」の結果からわかるように、男子に多いことによるものであろう。

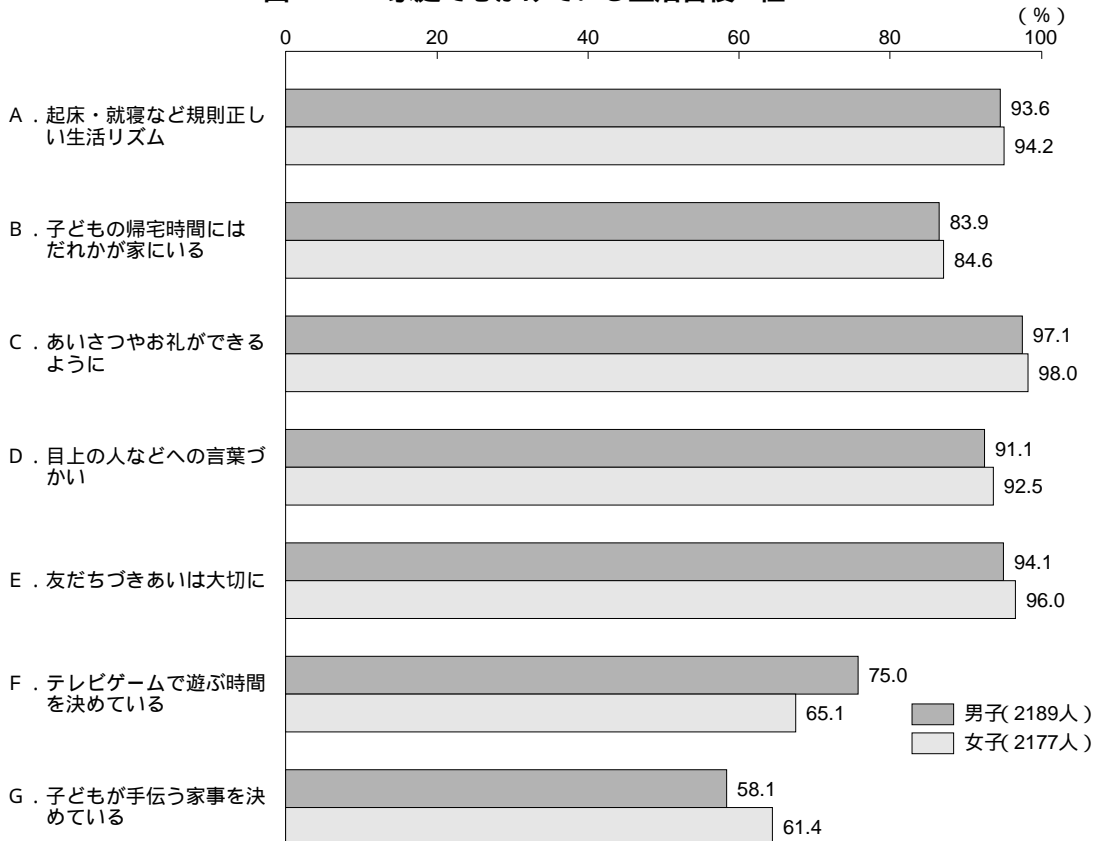
図2-11 家庭で心がけていること×母親の就業状況

「子どもが手伝う家事を決めている」



(小学生とは、小3生～小6生)

図2-12 家庭で心がけている生活習慣×性



「とても+まあ心がけている」割合

家庭の教育方針

家庭の教育方針など8項目についてどの程度あてはまるかをたずねた。「とてもあてはまる」の多い順に並べたのが図2-13である。さまざまな内容の項目なので、項目間の関連から三つの群に分けてその順にみていくことにしよう。最も強い相互関連を示す第1群は、「教育に必要なお金はかける」「教育・進学面で世間の流れに乗り遅れない」「習い事や塾に通わせないと不安」の3項目で、子どもの教育に積極的にエネルギーを注ごうとする方針をあらわす項目群である。第2群は、「子どもより親の意見を優先させている」「子どもがすることを親が決めたり手伝ったりする」の2項目で、親が日常のしつけ場面で主導権を発揮しているという内容である。この二つの項目群から結果をみていくことにしよう。

■ 勉強を重視する方針は中学生の母親に多い
(図2-13~15)

第1群についてみると、「教育に必要なお金はかける」に肯定的な母親は図2-13の通り、7割いる(とても+まああてはまる)が、「教育・進学面で世間の流れに乗り遅れない」「習い事や塾などに通わせないと不安」は5割に満たない肯定率で、あまり多くはない。

これらの項目に「あてはまる」としている割合は小学生の母親よりも中学生の母親に多い。学年ごとの肯定率をグラフにしたものが図2-14である。「教育に必要なお金はかける」は学年上昇につれて上がっていき、「教育・進学面で世間の流れに乗り遅れない」「習い事や塾などに通わせないと不安」は中3生でやや低下するが、おおむね上昇傾向がみら

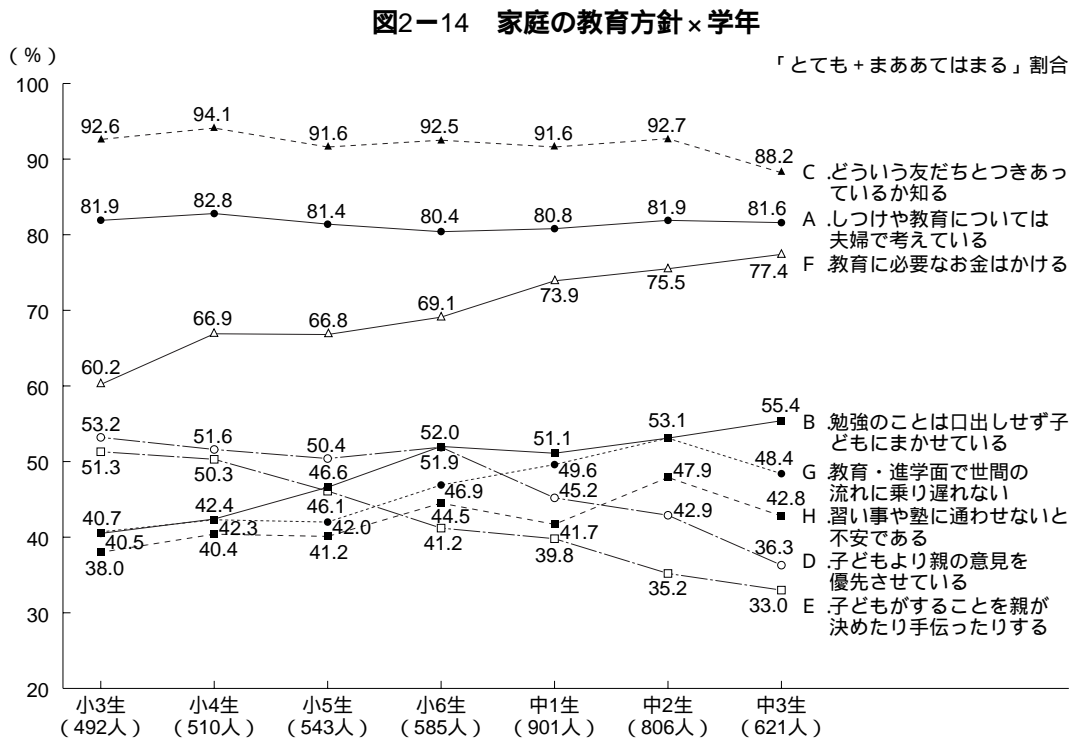
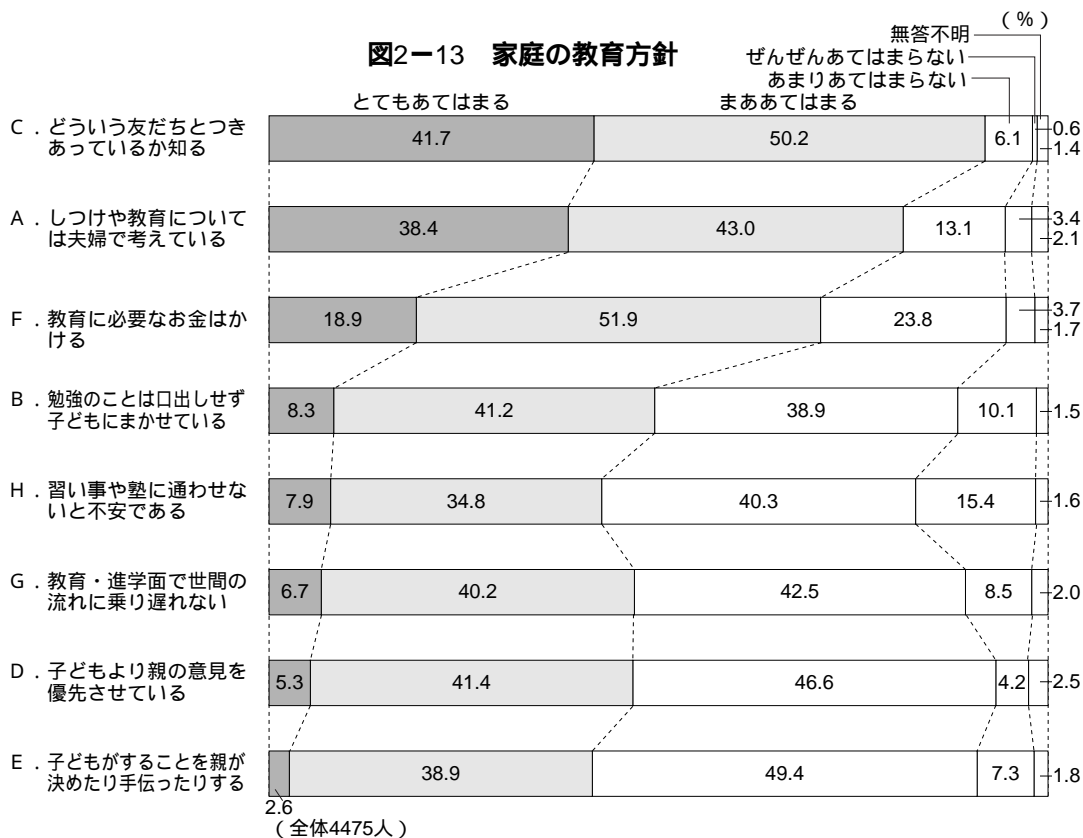
れる。子どもの高校・大学への進学が近づくと、受験競争に巻き込まれていく様子が見えてくる。

これについての性差をみると(図2-15)、「教育・進学面で世間の流れに乗り遅れない」「習い事や塾に通わせないと不安」の二つの項目で男子がやや多い。男子の母親のほうが勉強重視の方針をもっている傾向が見える。

■ 親が主導するしつけは子どもの成長で減少
(図2-13、14)

第2群、「親子で意見が違うとき、親の意見を優先させている」「子どもがすることを親が決めたり手伝ったりすることがある」も、肯定率は5割以下であった(図2-13)。このような、親の意見を優先させたり、ある意味で過度に手伝ったりすることは、学年が上になるにつれて減少していく様子が見え、とあらわれている(図2-14)。「親の意見を優先させている」に「あてはまる(とても+まあ)」としているのは小3生では53.2%だが、中3生になると36.3%と少なくなる。「親が決めたり手伝ったりする」も、小3生51.3%、中3生33.0%である。

母親の就業状況との関連をみると、「子どもがすることを親が決めたり手伝ったりする」に「あてはまる」としているのは、専業主婦に多く(45.4%)、常勤者に少ない(38.5%)。このような考え方は子どもの成長段階で異なると考えられるので、小・中学生別に関連をみたが、いずれの場合も母親の就業状況による違いが見いだされた。専業主婦は、「子どもがすることを自分がしてしまっている」と感じているのだろうか。



■ 夫婦協力の家庭教育（図2 - 13、14）

第3群、「子どものしつけや教育については夫婦で考えている」については、「とてもあてはまる」38.4%と「まああてはまる」43.0%を合わせて8割以上の母親が肯定している。学年別にみると、小3生から中3生までほとんど差がない（図2 - 14）。どの学年の母親にも共通にこの方針が用いられていることがわかる。

就業状況別には違いがみられた。「とても + まああてはまる」の割合は、専業主婦85.6%、パートタイマー81.1%、常勤者74.4%と、就業時間が長いほど割合が低くなっている。忙しい生活の中で夫婦で考える時間的余裕が比較的少ないのであろうか。しかし、「ぜんぜんあてはまらない」は、専業主婦の2.0%、常勤者でも5.5%とごく少数であった。

■ 子どもの友だちへの関心

（図2 - 13、14）

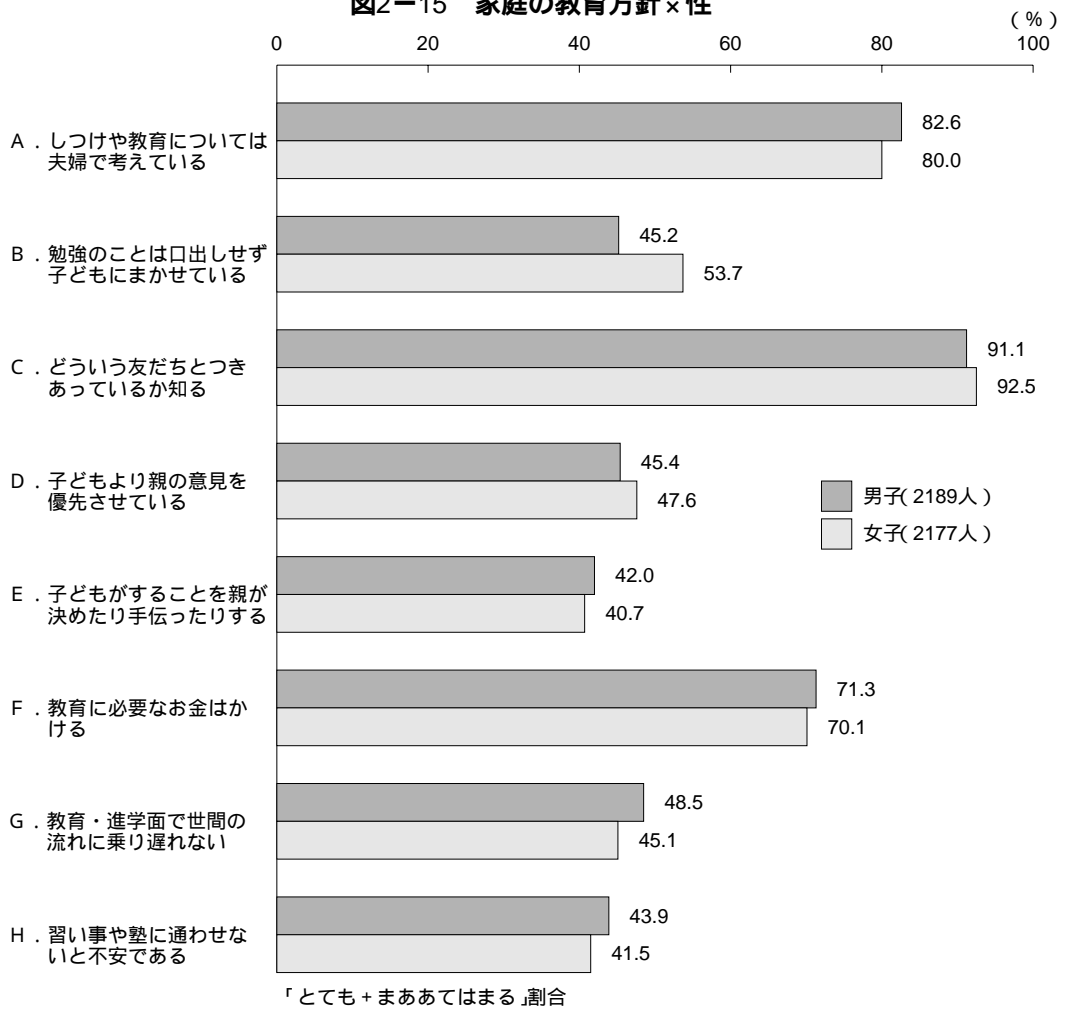
「子どもがどういう友だちとつきあっているかを知るようにしている」も、「とても + まああてはまる」とする母親が91.9%と圧倒的多数派である。図2 - 14の通り、学年差もみられず、どの学年でもこれが第1位であ

った。前節で、周囲とのコミュニケーションを重視するしつけ態度がみられたが、学校生活になじむためには友だち関係が重要だといわれるなか、子どもの友だち関係に強い関心をもつ母親がいかに多いかがわかる結果である。第1章1節の「現在の子育ての気がかり」でも5番目に多く「友だちとのかかわり方」があげられており、関連する結果となっている。

■ 男子と女子（図2 - 15）

家庭の教育方針は男女で違いがみられるだろうか。差の見いだされる項目は少ない。最もはっきりしているのは、「勉強のことは口出しせず子どもにまかせている」である。女子の母親のほうが、これについて「あてはまる」とする割合が高い。小・中学生別にみても、この性差はみられた。前述したように、「教育・進学面で世間の流れに乗り遅れない」と「習い事や塾に通わせないと不安」にも性差がみられたが、「勉強のことは口出しせずまかせる」についても同じ傾向の性差である。男子の母親のほうが勉強のしつけを厳しくしている様子が示されている。

図2-15 家庭の教育方針×性



現在の子育て生活の満足度

現在の子育て生活全般に対して母親としてのどのくらい満足しているかをたずねると、図2 - 16の通り、「まあ満足している」が65.4%と最も多かった。「とても満足している」を合わせると、72.6%の母親が満足している。

■ 子どもの学年差は小さい(図2 - 17)

学年別のグラフをみると、「とても満足している」の割合が小3生で最も低く、次第に上昇して中1生で8.9%に達し、中2生、中3生でやや低くなる、という傾向がみられる。しかし、わずかの差にすぎない。

■ 中学生では女子の母親が満足(図2 - 18)

性別による違いは全体では小さい。しかし小・中学生別にみると、図2 - 18のようになる。小3生から小6生の母親では子どもの性別による違いはないが、中学生になると、女子の母親の「とても+まあ満足している」が76.8%で男子の母親より多い。第2章1節の生活習慣や自立の状況についての満足度は明らかに女子の母親のほうが高かったが、それとも関係があろう。前節でみたが、勉強のことなどであれこれ言うことも女子に対しては少なくすむなど、教育・しつけ面で女子に対しては楽な場合が多いのかもしれない。

■ 子どもと一緒に遊ぶ母親は満足度が高い

子育て生活満足度に影響するのはやはり子育ての状況である。第1章8節との関連をみると、「子どもと一緒に遊ぶ・話をする」ことがある母親は子育て生活全般に満足している。また、「家族みんなで遊ぶ・話をする」機会の多い母親は満足度が高い。

■ 子どもと自分が成長したと感じる母親は満足度が高い

また、「子どもが成長したと感じる」ことや「子どもが親に対して思いやりのある言葉や態度を示してくれたと感じる」ことは子育ての喜びをもたらしてくれるようで、そのようなことが「よくある」または「ときどきある」母親は、子育て生活満足度が大変高い。そうした経験は、「子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる」という感慨につながるようで、その満足度も高い。

■ 就業状況と子育て生活満足度(図2 - 19)

最後に母親の就業状況との関連をみておこう。図2 - 19では専業主婦が最も満足度が高く、次いでパートタイマー、常勤者と続く。しかし、これを小・中学生別に集計すると、小3生～小6生では確かに専業主婦の満足度が高いが、中学生の母親ではこの違いはみられなくなる。小学生の働く母親への子育て支援の重要性を考えさせるデータである。

図2 - 16 現在の子育て生活全般の満足感

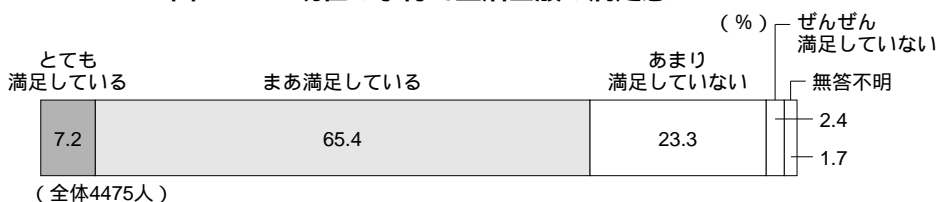


図2 - 17 現在の子育て生活全般の満足感×学年

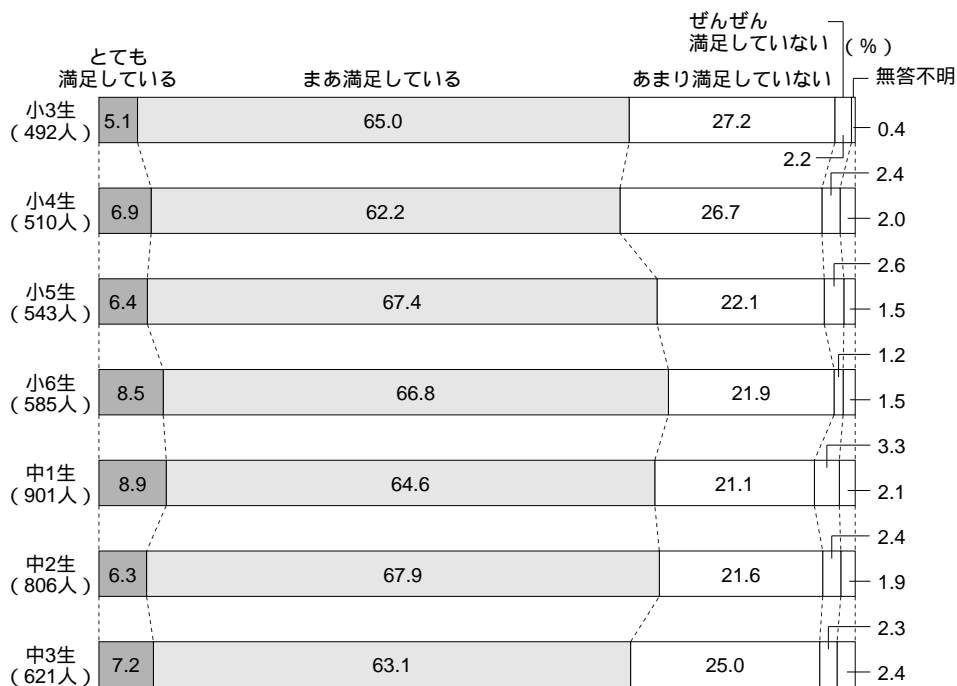


図2 - 18 現在の子育て生活全般の満足感×性・学年

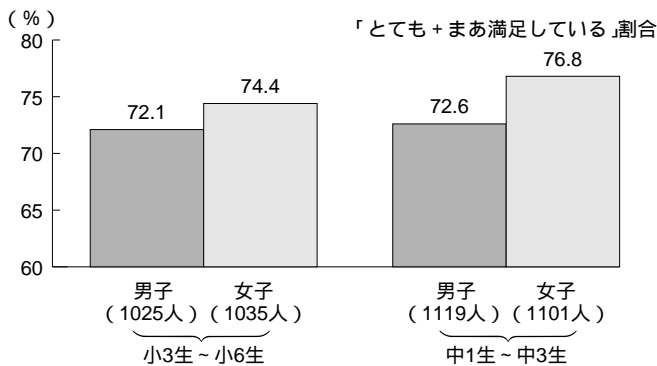


図2 - 19 現在の子育て生活全般の満足感×母親の就業状況

